

『シルヴィアの恋人たち』

—— 自立願望と自立しないものの重さ

鈴 江 璋 子

1. 既婚女性と社会

近代資本主義の確立に伴って「自立」は経済的自立を意味し、「価値」は市場価値をもって測られることとなった。職業を持たない、収入のない女性の地位は近代資本主義の発展に反比例して下落したと言えよう。「IT化と既婚女性の就職率」と題する最近のレポートで加茂美則氏は、20世紀後半において既婚女性の就職率は米国、日本ともに年々上昇している、この事実は夫の収入との関係を抜きにしては語れない、と、夫の収入の額と所属する社会階層、その階層の価値観と妻の職業との相関を論じている¹。それによると、一般的には夫の収入が上がるほど妻の就業率は下がる。しかし1980年代以降の傾向として、夫の収入階層によって既婚カップルの就労形態が3極化し、(1)夫の収入が低いにもかかわらず妻の就労割合が低い層、(2)夫の収入が中位で、妻の就労割合が高い層、そして(3)夫の収入が高く、妻の就労割合が低い層、に分かれる傾向にある。第2の中産階級においては既婚女性の就労はすでに定着しており、妻がフルタイムの仕事を持つことによって、かろうじて中間層という社会的位置を保持している。一方第3の富裕層においては妻の収入なしに家計を維持できるため、これら医師・弁護士・企業役員等の妻たちは専業主婦としてPTAやボランティア活動に力を発揮している。第1のタイプはここ20年間に始まった新しい現象で、従来は夫の低収入を補うために妻が就労するのが当然であった階層において、妻が就労しない傾向が出現している。これはIT化等の産業構造の変化によって単純労働が減少し、頭脳労働・抽象的思考方法が求められるようになったため、「そうした資質面でハンディのある層の女性が仕事をするのが以前より難しくなっているの

は間違いない」として、この傾向が貧富の格差を増大させていることを指摘し、日本においても低所得層の既婚婦人が仕事を見つけにくくなる心配も予想される、これが福祉政策などに深刻な影響を与える可能性もある、と警告している。

この状況は急速な近代化・工業化が進む19世紀中葉のイギリス社会と家庭、女性の自立を考察するに際して示唆的である。(3)の富裕層の生活形態と価値観およびモラルは、模倣すべき規範として(2)の中産階級のなかに取り込まれていた。つまりヴィクトリア女王が推奨した家庭第一主義のモラルは、中産階級のモラルでもあったのである。そしてその「家の中の天使」という理想の女性像の中に実は(1)の貧困層の妻の要素——家の外に出て社会において活躍するには、必要とされる知識や技術があまりにも欠落している——という要素が忍び込んでいたのである。ギヤスケルは女性が、急速に変化する社会のなかに位置を保持するためには、社会に適応するための新しい知識と技術が必要であることを繰り返し語っている。

2. 主 婦

『シルヴィアの恋人たち』² はイングランド北東岸の小さな港湾都市モンクスヘイヴン (Monkshaven) を舞台に、若者達の上に経過した8年の歳月を描く。モンクスヘイヴンは北洋捕鯨基地として栄えた港町であり、関連する産業や商業の中心地であり、同時に交易や密貿易の基地にもなるという、外に向かって開かれた性格を持つ小都会である。港湾にむかって高く切り立った高台は背後の農地や牧草地、さらに広くムア地帯へと連なっているために、田園・海洋・都市という3つの異なったトポスが形成され、それぞれの上に、農業・漁業・商業という3つの異なったカルチュアが生成されて、その対比が鮮やかである³。この3つのカルチュアは登場人物の性格や生き方のなかに特徴的に組み込まれている。それぞれのカルチュアにおいて、年月とともに変化と改革が行われ、それに適応できた人物と取り残された人物との対照も明らかである。

農村・漁村・都市において、女性のあり方もそれぞれに異なる。漁業、ことに遠洋漁業は圧倒的に男の仕事であり、しかも若く、体力があり、機敏で、鉦打ち・操船などに特殊技能をもつ男性が優位に立つ。女は男たちを船に乗せ、帰港を出

迎えるのが主要な仕事である。農村においては男にも女にもそれぞれの仕事があり、ジェンダーの差が少ない。各農家ごとに農場のあり方も、経営方針も異なり、自主性、独自性が尊重される。都市と、そこに特徴的な商業においては、男女の別なく、世間のひとびとの評価を基準に、大衆の一般的な価値観・道徳観に合わせて行動する柔軟性が必要である。相手の気持ちを推し量って自己を抑えるマナーが重視される結果、各自の意見を率直に表明できない。ジェンダー差よりも能力差が基準であり、法とルール、しきたり、対人関係が重要である。主婦のありかたにもそれぞれのカルチュアが反映される。ここでは農村の主婦と都会の主婦のありかたを、シルヴィア母子を中心に、検討したい。

シルヴィアの母親ベル（Bell Robson）は小農園の主婦という役割にぴったり嵌まった有能な主婦である。特に何かの才能があるというのではないが、上品で綺麗好き、趣味も良い。読み書きができ、よく夫の世話をし、娘をきちんと仕込み、家事全般、ことに料理には自信を持っている。お高くとまってといえるという批判は全く気に掛けない。使用人には分け隔てなく、思いやり深く接している。夫が話好きで豪放磊落、とかくルールから外れ勝ちであるのに対して、彼女は保守的で、面白みはないが、家庭をしっかり締めている。娘シルヴィアの結婚相手には自分の甥で町育ちのフィリップ・ヘップバーン（Philip Hepburn）が好ましいと考え、甥を力づける。それは彼が自分の実家方の青年で素姓や性格がよく分かっていること、町で洋品店の店員をしていて、職業も生活態度も堅実であり、読み書きもでき、間違いのない選択であること、なによりもフィリップが熱心にシルヴィアを想ってくれている、という母親らしい考えからである。彼女自身も年を取り、病気勝ちになって来ているが、このまま何事もなければ、農園の主婦として尊敬され、愛されて、平穩に一生を終えることができただろう。運命の変化は夫ダニエル（Daniel Robson）が水兵強制徴募隊の徴募活動に反対して、徴募隊集会所焼き討ち事件に参画したことに始まる。

町の人々は皆、強制徴募に反対だった。当局はこれに対して高圧的態度に出、過激派逮捕に踏み切ったのである。ダニエルは鬱憤ばらしの軽い気分で参加し、活動は大してしなかったのだが、首謀者として逮捕された。田舎に住む一家は当局の態度を察知できず、事態を甘くみたのである。警官隊が踏み込む前に夫をどこかに逃がすという才覚はベルにはなかった。踏み込まれた時、金切り声を挙げ、

まるでダニエルが家にいることを教えるような態度を取ってしまった。

対外的な問題はすべて父親に任せてきた母娘は、裁判という現実の前に途方に暮れる。冤罪を訴えるにも方法がわからない。二人は弁護のための費用捻出、最後の面会等の一切を、ただ一人頼りになる男性フィリップに委ねざるをえなかった。フィリップはロブソン農場を人に貸して費用を捻出する、シルヴィアたちはモンクスヘイブンの町のフォスター洋品店裏の彼の住居に来て住む、つまりシルヴィアが彼の妻になる以外に方法がないように取り計らった。農園の主婦ベルは、農園全体の収支・土地貸借関係等には一切無知であり、娘シルヴィアは契約書も読めなかった。しかし住み慣れた農園を出て、慣れぬ都会の、フィリップが勤める洋品店裏の住居で、フォスター一家古参の女中やばあやに囲まれて生活することは、ベル・ロブソンには耐え難かった。都会の、立ち働ける広い台所もなく、庭もない家で、彼女は主婦としての自立を諦め、痴呆状態へと退行し、完全に娘シルヴィアの負担となるのである。

母親ベルという自立せぬものの重荷に引かれて、シルヴィアは意にそまぬ結婚に踏み切らざるをえない。ベルはかねがねシルヴィアにフィリップとの結婚を勧めていたのであったが、その結婚式当日、あえて父のための喪服を着て挙式した花嫁シルヴィアの帰宅を迎えたのは、母親ベルの「うちに帰ろう！うちに帰ろう！」という叫びだった。家の外に出された、翼の短い「家の中の天使」は、幼児のように無力である。娘婿となったフィリップはベルに対して親切である。シルヴィアもこれに感謝し、その結果ベルに対する気配りが夫婦を繋ぐほとんど唯一の絆になっている。シルヴィアも母を優しく介護することによって、周囲の同情と好感を勝ち得るのである。

シルヴィア (Sylvia Robson—Hepburn) は田園に育った、感性豊かな、健康で美しい16歳の少女として登場する。父ダニエルの海の男らしい自由な感覚を受け継ぎ、正邪を判断する自然の直感を備えていた。強制徴募隊を悪と認識し、これに反対した父を正しいと思い、偽証によって父を陥れた男を許せないと感じた。しかしその正義が認められず、父が凶悪犯として処刑されたとき、彼女は社会に絶望する。この後も何度か、彼女は社会に対して要求を通すにはあまりに知識と実行力に欠ける自分を知らされ、絶望を深めるのである。

存在の基盤であった農園を出て、都会の、自分に好意的ではない人々の中で、

肩身狭い暮しを余儀なくされると、まだ19歳のシルヴィア自身にも価値観の混乱が生じる。彼女はヘイターズバンクの自然の中で育ち、読み書きよりは野原を自由に駆けまわって、家畜の世話をしたり乳搾りや糸紡ぎをするのが好きだった。この地方では羊毛や亜麻糸紡ぎも農家の女性の仕事で、ギャスケルは糸紡ぎをする女性の姿はハーブ演奏に負けないくらい美しいと、紹介している。

A woman stands at the great wool-wheel, one arm extended, the other holding the thread, her head thrown back to take in all the scope of her occupation ; or, if it is the lesser spinning-wheel for flax — and it was this that Sylvia moved forwards to-night — the pretty sound of the buzzing, whirring motion, the attitude of the spinner, foot and hand alike engaged in the business — the bunch of gay coloured ribbon that ties the bundle of flax on the rock — all make it into a picturesque piece of domestic business that may rival harp-playing any day for the amount of softness and grace which it calls out. (44)

シルヴィアは家畜の世話や乳絞りも得意で、ある冬の夜には恋人キンレイドにバター造りを手伝わせて、勝ち気な働き者ぶりを示すのである。絞りたての牛乳の香りと湯気が二人を包んで、牧歌的で暖かな、ほほえましい恋の情景が展開する。この二人なら人生の共同作業も順調に進めていけそうである。

[……] In his haste to help her, Charley took up one of the pails.

“Eh! that'n 's to be strained. Yo' have a' the cow's hair in. Mother's very particular, and cannot abide a hair.”

So she went over to her awkward dairymaid, and before she — but not he — was aware of the sweet proximity, she was adjusting his happy awkward arms to the new office of holding a milk-strainer over the bowl, and pouring the white liquid through it.

“There!” said she, looking up for a moment, and half blushing ; “now you'll know how to do it next time.” (193-94)

シルヴィアの恋人チャールズ・キンレイド (Charles Kinraid) は捕鯨船の船打ちとして、腕の良さでは北極海一と評判の若者だった。彼は海の男らしい闊達で暖かな雰囲気と、理不尽なものには膝を屈しない正義感を持ち、不法な強制徴募に対してはナイフをかざして捨て身で戦う男だった。純情なシルヴィアは彼のヒロイズムに感動した。その気持ちはキンレイドにも通じて、二人は婚約したのだった。しかし、次の航海から帰ったら結婚するのだと、幸福の絶頂にあった彼は、乗船直前に徴募隊に襲われ、拉致されてしまう。真相不明のままキンレイド溺死説が流され、シルヴィアはそれを信じた。実は拉致の現場にはフィリップがいて、キンレイドから、拉致された事実をシルヴィアに語るよう、愛の確認の言葉を告げるよう、依頼されたのだが、フィリップは実行しなかった。恋人キンレイドが死んではいない、徴募隊に拉致された時、自分宛てに「必ず帰る。結婚の約束を忘れないでくれ」という言葉を残していったのだと知らされていたらシルヴィアは決してフィリップとは結婚しなかっただろう。それを恐れてフィリップはこの事実をシルヴィアに告げなかったのであるが。父はひそかに徴募隊を疑い、徴募隊に対して過激な行動に出たのであった。父の処刑、母の錯乱という重荷を背負って、シルヴィアはフィリップとの結婚に踏み切らざるを得なかった。

慣れない町なかで、フィリップ側の人達に囲まれて新生活を始める事は、暮らしにこそ不自由ないものの、幽閉されているのと同じだった。フィリップは着実に店員から共同経営者に昇格し、シルヴィアは経営者の奥様となったのだが、乳搾りの仕事も、糸紡ぎの仕事もない町なかでは、彼女は自分の天分を発揮出来ない。農園では引用(1)(2)のようにのびのびと立ち働いたシルヴィアが、自分の仕事を見つけられないのである。いわゆる「家事」さえ、古くからいる女中のフィービが仕切り、奥様に手を出させない。この頃の彼女の唯一の「しごと」は散歩に出ることだった。都会の女性は散歩にも出ないで家にいるのが普通だったので、家を抜け出してひとりで海に見える崖まで歩いて行くのが、楽しくもやましい彼女の仕事だった。親しい人を礼儀正しく訪問すること、教会に行くこと... 「みんな」を基準に自己を抑制し、全体の意向に従う、皆がするから自分もする、それがルールだという町の文化を、彼女は拘束的・抑圧的に感じる。

その彼女に出来ることは母親の介護、出産後は育児だった。自立できない老女や嬰兒を愛情込めて介護することは、たしかに良くわかる美德である。独自の信

念と価値観を持ち、仕事ができ、自立した農村女性であったシルヴィアは、価値観の異なるフィリップとの結婚によって価値体系を崩され、なにをしいのかわからない。彼女は自己を投入できる仕事が見つからないままに、とりあえず良くわかる美德にすがりつく。「控え目な」「美しく、礼儀をわきまえた女性」(368)として洋品店の老所有者に称賛され、感情を表面に出さないことを進歩としてヘスターに認められ(383)、アリスに教えられて聖書をたどり読み(445)、「夫に絶対服従する」(381, 383)という諦念のなかに自己を押し込めていくうちに、シルヴィアは本来の彼女らしさを失っていく。それは決して彼女自身が求めた生きかたではなく、フィリップが求めたシルヴィアでもなかったのであるが。自立のエネルギーを失ったシルヴィアは、赤ん坊・老女という自立できないものを介護して、その重さに引かれ、自分も自立できない「あまりにも幼い」(440)ものへと落ちていくのである。家庭の中で保護されている女性も、社会的には決して保護されていない。シルヴィアは夫の失踪後、子供の親権は父親にあって、母親にはないことを知って愕然とする。男性中心社会の制度や策略はもう嫌だ(435)と彼女は叫ぶ。

3. 介 護

現在の日本では看護婦と、介護福祉士、社会福祉士と、それぞれ資格が違い、独立した専門職になっている。一方19世紀英国ではそれら各種の要素——病気・老化・失業・貧困・階級・人種等の社会問題、経済問題、環境問題が医学の問題に混じり合って、多角的に保護を必要とする人々が存在した。それに加えて戦争とそれによる多数の傷病兵の出現が、戦地で傷病兵の救護に当たる救護看護婦という専門職を生むにいたる。以後赤十字社に属する従軍看護婦、軍直属の陸海軍看護婦などいわば公的にサポートされる、広い意味で国家に奉仕する女性の専門職が出現し、20世紀には女性兵士も制度化されるなど、女性の職業選択の幅も時代と共に拡大してきている。

ただし『シルヴィアの恋人たち』においてはこのような専門職としての介護者は登場しない。『シルヴィアの恋人たち』出版は1863年、執筆に要した歳月は1859から1863年、物語の内容は1793年10月から1800年夏までであり、一

方現実のクリミア戦争は1853年から56年、国際赤十字の発足が1863年であり、戦争、海軍の活躍、傷病兵ケアの問題、フローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) の活動などは当然ギヤスケルの念頭にあったと考えられる。もともと介護はギヤスケルの重要なモチーフの一つであるが、病人看護 (nursing) に関しては『ルース』において問題提起がなされている。『シルヴィアの恋人たち』においては戦闘による負傷者は、軍事病院等専門の医療関係者によって看護されることが語られるだけで、作品の表面には登場しない。介護を必要とするものは重症の病人ではなく、シルヴィアの老母イザベル、ヘスターの老母アリス・ローズら加齢によって自立能力を失った女性たちで、娘であり主婦であるシルヴィアが優しく介護に当たっていれば十分である。シルヴィアは彼女に厳しかったアリス・ローズを含めて2人の老女の介護をし1人の幼い娘を育てて、周囲の評価を得るのである。

しかし彼女は一番大切な看護・介護すなわち夫のフィリップに対する介護をしない。作中の誰もが信じないのだが、フィリップは海軍に徴募され、海外の戦場で戦い、軍艦上での暴発事故の巻き添えを喰って全身に大火傷を負い、顎が砕け、容貌も醜く変わってしまったのである。軍事病院で手当てを受け、一応治癒して、故郷に向かうのだが、知人に顔を合わせる自信が持てない。彼は町外れの貧しい下宿屋に一室を借り、ささやかな軍人年金をただ一つの収入として、貧しい、食べものにも事欠く、希望のない生活をしながら、ひそかに妻シルヴィアを見守るのである。貧しい障害者となったフィリップを世話するのは、シルヴィアの実家の使用人ケスターの妹ドブソン未亡人である。荒海から救い出された瀕死のフィリップのずぶ濡れの衣服を鉢で切って脱がせ、ベッドに寝かせたのはドブソン未亡人である。シルヴィアは間接的に多少の金銭的援助をしたのだが、彼を直接介護することはない。シルヴィアは生まれも育ちも「農園主のお嬢さん・大店の奥様」という、作品のヒロインであり、異性の介護という生臭い部分のある仕事はふさわしくないのである。弱っているとはいえ一人前の男を、中流階級の若く美しい人妻が介護する、その肉体に触るといえるのは、社会常識からみて適当ではなく、重症の病人看護は下層階級出身の脇役たちの役どころだったのである。

介護とは肉体的・精神的に自立できないものを、できるものが助けるという構図である。そのためロマン主義文学においては一人前の若い男性が女性に体の面

倒を見て貰うという状況は考えられなかった。美しくかよわいレディが頼もしいナイトに助けられるのが定型であり、特に自己を嘆く、嘆いて見せるという局面以外では男性はつねに強く、知力・体力ともに優れた存在として、相手の女性を屈伏させなければならなかったのである。『シルヴィアの恋人たち』においても、キンレイドは介護されている姿を表に見せない。フィリップは瀕死の状態にあってもシルヴィアより理念において強く、家父長的である。彼は自己を犠牲にして、自分を父とも知らぬ幼い娘を海から救い、シルヴィアにながながと告白をし、片づけ、二人の救済を神に祈って息絶えるという徳行を果たすのである。

戦争による多くの若い傷病兵の出現は男女の関係に新しい局面を開いた。弱い、無力な男性の顕在化とその正当化である。彼らは「国家のために」傷つき、弱くなったのであり、弱さを恥じる必要はない。そして彼等を看護するために若くて美しく、優しく強い看護婦が出現したのである。20世紀という戦争の時代においてはヘミングウェイの *Farewell to Arms* (1928) が、この新しいシチュエーションを捕らえた典型と言えるだろう。これはさらに男性の医者と女性の看護婦というジェンダー差を生むことになるのである。戦争によるものではないが、『ルース』に影響を与えたシャーロット・ブロンテの *Jane Eyre* (1847) においては、心身共に傷ついたロチェスターを介護するジェインという、男性を介護する、若くて強い女性のありかたが新鮮であった。アメリカの女性作家エレン・グラスゴウは *Barren Ground* (1925)、*Vein of Iron* (1935) などにおいて、試練によって強くなったヒロインが、かつて自分を裏切り、いま心身ともに衰弱している恋人を介護する姿を描く。女性の献身・愛・強さ・意志が看護という職業を通じて増幅されるという、近代文学が開いた新しい局面である。介護される弱い男性がヒーローになり得ることを、男女の力関係の複雑化の一例として、さらに考察を加えていきたい。

4. 職業婦人

作中ただ一人、近代的な意味で職業人と呼べる女性はヘスター・ローズ (Hester Rose) である。彼女は真面目で有能、読み書き・計算などの知的作業ができ、商品に関する知識も豊富で、商品管理や接客の面で店にとって必要不可

欠な存在である。しかし作中のだれも、彼女が経営者として大成することを期待してはいない。彼女は未婚の若い女性であり、小説の中の若い女性の役割は、誰かと恋愛し、曲折を経て誰かと結婚することである。実は彼女はずっとフィリップの身近かにあり、彼に心を寄せ、愛し、尊敬し、彼との結婚を望んできたのだった。フィリップに対する愛は彼がシルヴィアと結婚してからも変わらない。ただ、その気持ちを深く秘し隠しているために周囲の誰もがそれに気付かず、当のフィリップ自身も全くそれに気付かないのである。彼はシルヴィアに対する愛情を憚りなくヘスターに示して、深く彼女を悲しませさえする。母アリス・ローズ (Alice Rose) だけが彼女の気持ちを知っていて、フィリップの鈍感さを憎む。そのためフィリップに対して強い態度に出、娘の恋を伝えるには逆効果の役割を果たしてしまう。

店の所有者フォスター兄弟 (John / Jeremiah Foster) も遠縁に当たるクルソン (William Coulson) との結婚の意思を尋ねて彼女の気持ちを傷つける。彼等はヘスターの能力を評価してはいるのだが、店の経営権を譲るに際してはクルソンとフィリップに声を掛け、ヘスターに関しては以下のようにいう。

“We have not thought it necessary to commend Hester Rose to you; if she had been a lad, she would have had a third o’ the business along wi’ yo’. Being a woman, it’s ill troubling her with a partnership; better give her a fixed salary till such time as she marries.” (185)

「ヘスター・ローズのことを君達に話しておく必要はないと思ってはいたんだがね。勿論、もしあの娘が男だったら、3人目の人物として君達と一緒にビジネスに加わってもらはずなんだ。女だから共同経営者になるのも荷が重かろう。あの娘には定まった給料を支払うようにした方がいい。結婚して、仕事を辞める時までな」

これが当時、いや20世紀に至っても世間一般の人々が女性と職業に関して抱いている感覚であった。クルソンとフィリップは心から賛成して、彼女の給料の額はフォスター兄弟が決めてくれるように、そして自分達の収入が増えるにつれ

て昇給するように設定してくれるよう申し出る。「なぜなら二人ともヘスターのことを妹と思い、アリスのことは母だと思っている」(186) のだから、というのが二人の合意だった。

この善意にみちた会話のなかから、女性は共同経営者になる能力がないと思われること、職業は結婚までの腰掛けと考えられていること、経営者の妹や母と思って貰えない場合、女店員は固定給ではなくて歩合給で働かなければならなかったこと、店の繁栄が彼女たちの給与に反映されなかったという事実があぶりだされてくる。小説の中ではジェレマイアが徐々に持ち株を譲っていくので、後にはヘスターは事実上の共同経営者になるのであるが。

婦人服部門主任としてヘスターは多忙になり、母アリスの介護をシルヴィアに任せる。シルヴィアはフィリップの妻であり、ヘスターはフィリップを片想いに想う女性である。フィリップに繋るこの二人の有能な女性は内と外——あるいは「女」と「男」——の役割分担によって、フィリップなしで巧みに家庭とビジネスを運営していく。

物語の最後において、ヘスター・ローズは優れた女性経営者として名を残しはしない。シルヴィアがフィリップの後を追うように若くして亡くなった後、彼女はまだ幼い遺児ベラ (Bella Hepburn) を育て上げ、私財を投じて、フィリップを偲んで、体の不自由な水夫と兵士のための救貧院を建てた。その愛と自己犠牲によって彼女は人々の称賛を得、名流婦人の名を残し、小説の副筋のヒロインとしての位置を確立するのである。女性キャラクターはロマンス・プロットの中に取り込まれてなければならない。これが読者の嗜好であり、ギaskellの選択だったのである。

注

1. 加茂美則。「IT化と既婚女性の就職率」。朝日新聞 2000年9月2日夕刊参照。
2. 定本には A. W. Ward ed., *The works of Mrs. Gaskell*. Vol. 6. The Knutsford Edition, 1906; rpt., New York: AMS Press, 1972. を使用。同書からの引用は頁数を引用箇所末尾の括弧内に示す。
3. この問題に関しては松岡光治編『ギaskellの文学——ヴィクトリア朝文化を多面的に照射する』(英宝社、2001年)中の拙論「『シルヴィアの恋人たち』——国の政策に翻弄される」を参照されたい。